

席田青木遺跡 7

—第7次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1120集

2011

福岡市教育委員会

MUSHIRODA AO KI
席田青木遺跡 7

—第7次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1120集



遺跡略号 MAK-7

調査番号 0902

2011

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市内には、数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの責務であります。また、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって地下に埋もれた貴重な先人の足跡が失われていくことも事実であります。そのため、本市教育委員会では事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存によって後の時代まで伝えるよう努めています。

本書は、施設建設に伴い調査を実施した席田青木遺跡第7次調査の成果を報告するものです。今回の調査では、古代の水田跡を確認すると共に、土師器や須恵器、木製品が出土しました。これらは、当時の席田地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、福岡給油施設株式会社様をはじめとする数多くの関係者のご理解とご協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成23年3月18日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が施設建設に伴い、福岡市博多区大字東平尾677-2、678-2において発掘調査を実施した席田青木遺跡第7次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、民間受託事業として実施した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、榎本義嗣・名取さつきが行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、榎本・名取が行った。
6. 本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、榎本が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は、榎本・名取が行った。
8. 本書に掲載した方位は磁北で、真北より $6^{\circ}40'$ 西偏する。
9. 本書に掲載した国土座標値は、世界測地系(第II座標系)によるもので、座標北を本文中ではGNとする。
10. 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
11. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、同センターに保管される予定である。
12. 本書の執筆および編集は、榎本が行った。

遺跡名	席田青木遺跡	調査次數	第7次	遺跡略号	MAK-7
調査番号	0902	分布地図図幅名	上白井22	遺跡登録番号	020080
申請地面積	1,500.0m ²	調査対象面積	422.0m ²	調査面積	390.0m ²
調査地	福岡市博多区大字東平尾677-2、678-2			事前審査番号	20-2-753
調査期間	平成21(2009)年4月20日～5月27日				

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
1. 席田青木遺跡と周辺の遺跡	2
2. 席田青木遺跡のこれまでの調査	2
III. 調査の記録	7
1. 概要	7
2. 遺構と遺物	7
1) 001 水田	7
2) 002 流路	12
3. 結語	14

挿図目次

第1図 席田青木遺跡位置図(1/25,000)	3
第2図 席田青木遺跡周辺地形図(1/6,000)	4
第3図 席田青木遺跡周辺地形図(昭和初期)(1/6,000)	5
第4図 調査区位置図(1/1,000)	6
第5図 調査区全体図(1/150)	8
第6図 調査区南壁および東壁土層実測図(1/80)	9
第7図 001 水田杭列実測図(1/40)	10
第8図 001 水田出土遺物実測図(1)(1/3、1/4)	11
第9図 001 水田出土遺物実測図(2)(1/8)	12
第10図 002 流路出土遺物実測図(1/3)	13

表目次

第1表 席田青木遺跡調査一覧表	5
-----------------	---

図版目次

図版1 (1)調査区全景(西から)	(2)調査区南壁土層(北西から)
図版2 (1)001 水田中央部足跡検出状況(南から)	(2)001 水田杭列検出状況(北西から)
(3)001 水田杭列断ち割り状況(南から)	
図版3 (1)001 水田土器類出土状況(北から)	(2)001 水田須恵器出土状況(北から)
(3)002 流路南壁土層(北から)	
図版4 出土遺物	

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成20(2008)年12月25日付けで、福岡市博多区大字東平尾677-2、678-2(敷地面積:1,500.0m²)における施設建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、福岡給油施設株式会社福岡空港事業所より福岡市教育委員会宛てになされた(事前審査番号:20-2-753)。この建設工事は、航空機給油関係の大型車両の整備工場を新設するものである。

これを受けた教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課事前審査係では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である席田青木遺跡に隣接することから審査を行うこととした。当該地を含めた福岡空港東側では、国土交通省大阪航空局福岡空港事務所の依頼により同月10・11日に埋蔵文化財の確認調査をすでに実施し、施設建築予定地の地表下約2mで砂に覆われた水田面を確認していたことから、この成果をもとに両者で協議を進めた。その結果、建設工事による埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物建築面積422.0m²を対象とした記録保存のための本調査を実施することとなった。

その後、平成21年3月31日に福岡給油施設株式会社福岡空港事業所取締役所長を委託者、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年4月20日より発掘調査を、翌平成22年度に整理・報告書作成を行うこととなった。

2. 調査の組織

調査委託：福岡給油施設株式会社福岡空港事業所

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：埋蔵文化財第2課長 田中壽夫

同課調査第1係長 杉山富雄(調査) 米倉秀紀(整理)

調査庶務：文化財管理課管理係 山本朋子(調査)

埋蔵文化財第1課管理係 井上幸江(整理)

事前審査：埋蔵文化財第1課事前審査係長 宮井善朗

同課事前審査係主任文化財主事 加藤良彦

同課事前審査係文化財主事 藏富士寛

調査担当：埋蔵文化財第2課調査第1係文化財主事 榎本義嗣

調査作業：阿部純子 近藤末孝 崎村雄介 関哲也 永松弘恵 中村幸子 名取さつき 花田則子
原勝輝 光安昌子 鶩崎哲夫

整理作業：木本恵利子 樋口三恵子 松尾真澄

発掘調査から報告書作成に至るまで、福岡給油施設株式会社福岡空港事業所をはじめとする関係者各位には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

II. 遺跡の立地と環境

1. 席田青木遺跡と周辺の遺跡

玄界灘に北面し、背後に背振・三郡山系をひかえる福岡市には、これらより派生する山塊、丘陵によって画される中小の平野が展開しており、東側から柏屋、福岡、早良、今宿平野と呼称される。いずれの各平野も古くから独自の歴史的、地理的環境を有している。今回報告する席田青木遺跡の位置する福岡平野は、西側には背振山系に属する油山(標高: 597 m)から北側に発達する丘陵が派生し、早良平野と画される。また、東側には三郡山地より派生した大城山(標高: 410 m)の山麓から北西方に月隈丘陵が延びて、柏屋平野との境界をなしている。平野中央部には御笠川、那珂川が博多湾へと北流し、沖積地が形成されるが、洪積段丘が南北に連なる。また、沿岸部には海岸砂丘が発達する。

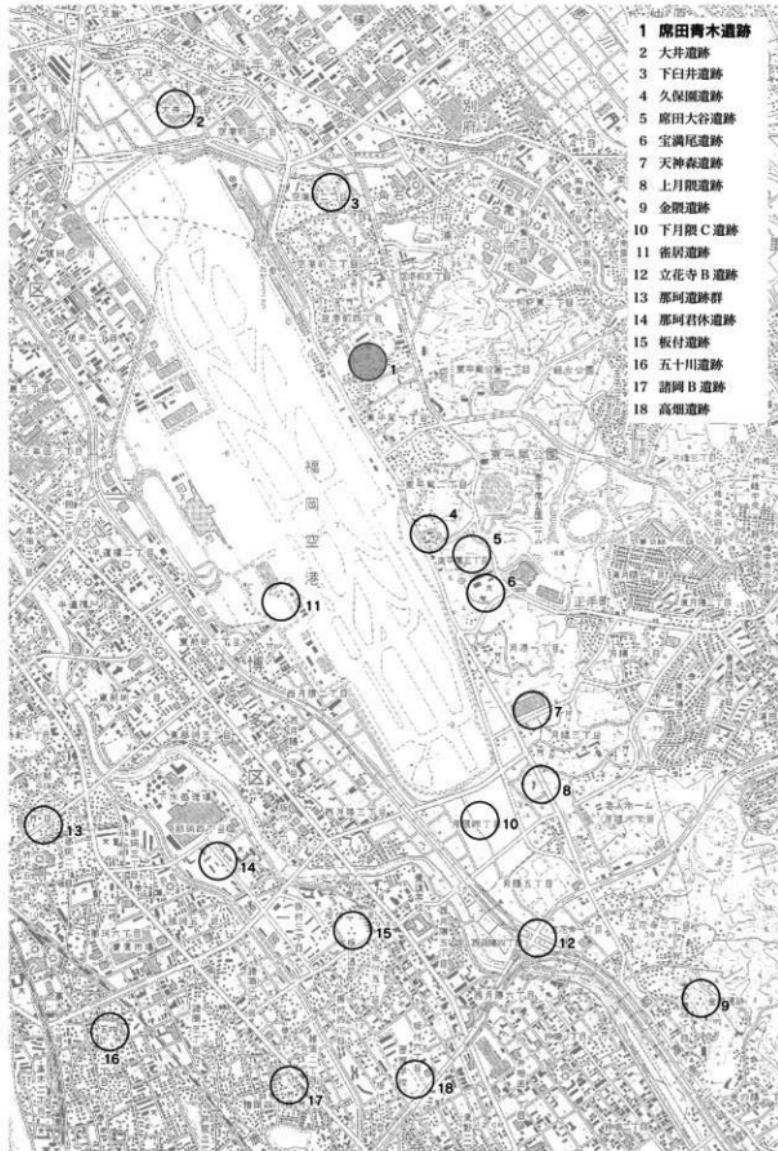
本遺跡は、先述した月隈丘陵の北西部に位置し、同丘陵から西側の平野部に向けて多数派生する支丘の一つに占地している。該地周辺は宅地化により地形の大規模な改変が進むが(第2図)、第3図に示した昭和初期の地図に拠れば、遺跡が占地する支丘は南西方向に延び、谷の開析によって舌状を呈する。また、その端部は沖積地に埋没し、その先端に今回報告する第7次調査区は位置する。

この丘陵上や条里地割を残す西側の沖積地には多数の遺跡が知られる。まず、丘陵部では本遺跡同様に派生する大小の支丘に金隈遺跡や宝満尾遺跡、上月隈遺跡等の弥生時代墓地や久保園遺跡や席田大谷遺跡に代表される弥生時代集落が染かれる。前者の埋葬遺構には船載鏡や武器形青銅器の副葬が認められ、後者では中期から後期の遺構が増加する中で、大形掘立柱建物の存在や青銅器鋳型の出土が確認されている。これらは、集団を統率する首長や青銅器生産に関わる集団の存在を示唆し、この丘陵部周辺が該期の中核的役割を担つたことを物語る。

また、福岡空港周辺の平野部では、雀居遺跡や下月隈C遺跡に代表される沖積地での調査が近年進み、弥生時代早期に始まる微高地の集落や条里地割に一致する水田が重層的に確認されている。特に弥生時代早・前期の集落の存在や後期の礎板を用いた掘立柱建物、「皇后宮職」木簡や人形・斎事等の律令的祭祀具、条里地割への水田区画の変遷等、様々な注目される成果があがっており、沖積地における土地利用のあり方を考察する上でも興味深い。

2. 席田青木遺跡のこれまでの調査

本遺跡ではこれまでに7次におよぶ調査が実施されている(第2・3図、第1表)。第1次は支丘の基部に近い尾根線上で行われた広範囲の調査で、160基を超える甕棺墓や土壙墓を主体とする弥生時代中期前半から後期初頭の墓地が確認された。中世戦国期には、「中山城」との伝承が残る山城が築城され、曲輪や堀切、横堀と考えられる遺構の一部が検出されている。また、近世には尾根の数箇所に分かれ、550基を越える墓地が造営される。第2次は第1次調査地点から南西側に下った尾根の一部を含む南側斜面の谷部を対象とした調査で、ほぼ同時期の弥生時代墓地の小群が尾根線上で、谷部斜面では弥生時代後期後半の集落の一部や鎌倉期の中世墓が確認されている。第3・6次調査は第2次と尾根を挟んだ北西側の緩斜面上で行われたもので、弥生時代後期後半から古墳時代前期、中世前半の集落が抜がることが明らかとなった。また、第3次で検出された古墳時代後期の方形区画溝とその内部の掘立柱建物は一般集落とは異なる居宅であろう。第4・5次は丘陵端部で実施された調査で、両調査区の中央付近に狭い尾根が通り、南北両方向に傾斜して沖積層に至る。尾根部分は削平を受けるもの、弥生時代中期後半の甕棺墓が数基確認され、小規模な墓地であった可能性が高い。また、沖積部には弥生時代後期後半以降の溝が丘陵裾部に沿うように設けられるが、機能は判然としない。た



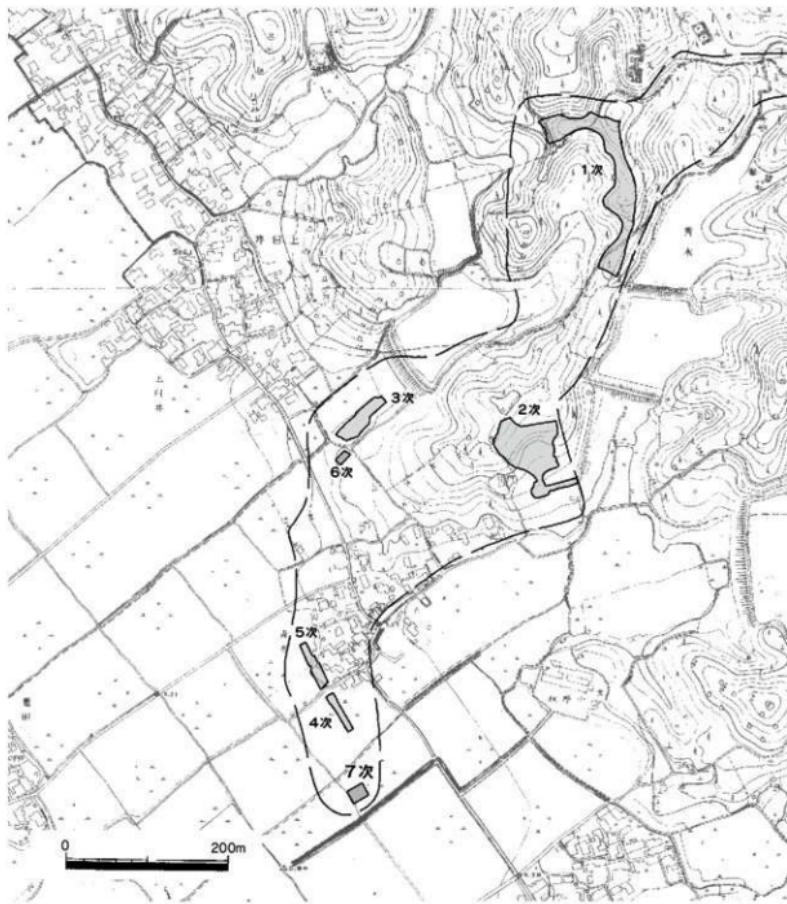
第1図 席田青木遺跡位置図 (1 / 25,000)



第2図 席田青木遺跡周辺地形図 (1 / 6,000)

だし、斜面に形成されたほぼ同時期の包含層の遺物量は多く、比較的まとまった集落が存在したことが窺える。また、尾根付近には中世後半の遺構も散見する。

今回報告する第7次調査は、本遺跡の南端部の沖積地に位置し、丘陵部やその周辺を対象とした上述の調査地とは立地や遺構の性格が大きく異なる。



第3図 席田青木遺跡周辺地形図（昭和初期）(1 / 6,000)

調査次数	調査年度	主な検出遺構の時期と性格	報 文
第1次	1992	弥生時代墓地、古墳時代墓地、中世山城、近世墓	『席田青木遺跡1』市報第356集(1993)
第2次	1993	弥生時代墓地・集落、中世墓・集落	『席田青木遺跡2』市報第408集(1995)
第3次	1995	弥生～古墳時代集落、中世集落	『席田青木遺跡3』市報第534集(1997)
第4次	2000	弥生時代集落 中世集落	『久保園遺跡2・席田青木遺跡4』市報第712集(2002)
第5次	2001	弥生～古墳時代集落、中世集落	『席田青木遺跡5』市報第777集(2003)
第6次	2005	弥生時代集落 中世集落	『席田青木遺跡6』市報第933集(2007)
第7次	2009	古代水田	『席田青木遺跡7』市報第1120集(2011)

第1表 席田青木遺跡調査一覧表



第4図 調査区位置図 (1 / 1,000)

III. 調査の記録

1. 概要

今回報告する席田青木遺跡第7次調査区は、福岡空港内の博多区大字東平尾677-2、678-2に所在し、同遺跡南西端の西側に向かって緩く傾斜する沖積地に立地している。北東側の丘陵端部に該当する地点では、第4・5次調査が行われている。調査前の状況は、芝張りされた平地で、標高は6.4～6.7mを測る。

調査区の土層(第6図参照)は、まず地表下約1m超まで空港造成時の真砂土を主体とする客土層(1層)がある。その下層には空港造成以前の戦前と推定される旧水田層がほぼ水平に堆積し、2層はその耕作土、3層群は床土と考えられる。また、調査区東側に認められた水平堆積層(4層)も近代～近世の旧水田層と推測される。更に下層には後述する古代水田面(001水田)である褐色シルト質弱粘性土(A層)を覆うようにシルトや砂等の水性堆積物が顕著に認められる。水田西半部では、調査区西端で検出した南北方向の流路(002流路)から氾濫した洪水砂(13・15・16層)が堆積する。また、標高のやや高い水田東側では砂の堆積は一部に限られ、暗灰褐色シルト(8層)が水田面を薄く覆っていた。なお、A層については、部分的にトレント掘削を行った結果、深さ0.2～0.5mで、淡青灰褐色粘性土(B層)に至る。A・B両層からは遺物は出土しておらず、基盤層と考えられる。

今回の調査は、表層から水田面(A層)直上までの堆積層の大半を重機で剥ぎ取った上で開始し、以下は人力によって掘り下げた。その結果、一部に旧建築物によると推測される搅乱があるものの、調査区の東側約2/3で古代の水田1面、西側では自然流路1条を検出することができた。出土遺物量は、コンテナケースにして2箱である。

発掘調査は、表土および客土層の働き取りおよび搬出終了後の平成21(2009)年4月20日に着手した。まず、重機によって働き取り後の面から堆積層の剥ぎ取りを上述のとおり実施し、翌日に重機による作業と併行しながら、発掘器材を搬入した。その後、ベルトコンベアの設置や壁面の清掃および養生を行い、23日よりトレント掘削や遺構検出の作業を始めた。順次、遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、1/100縮尺による等高線図作成、遺物取り上げ等の作業を進めた。これらがほぼ終了した5月21日に高所作業車によって全体写真を撮影し、26日に重機による埋め戻しを行った。翌27日には、発掘器材等を撤収し、第7次調査を完了した。

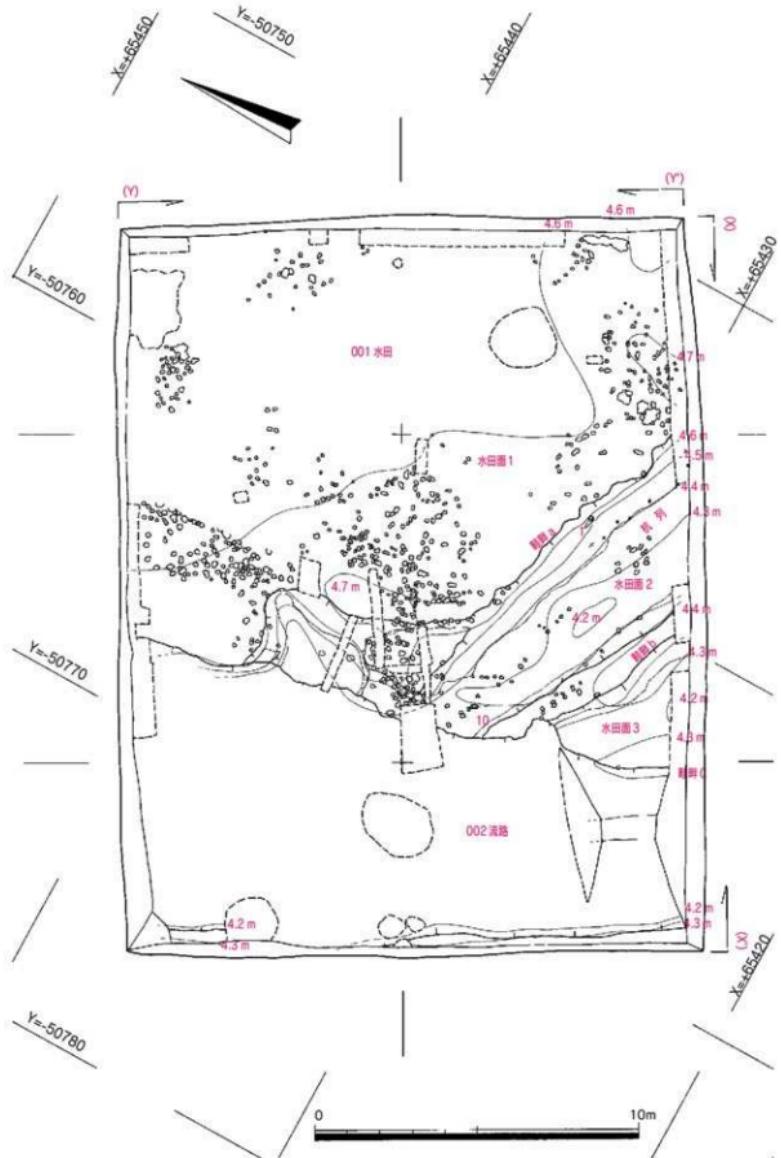
なお、調査対象面積は、「I.-I.調査に至る経緯」とおり、敷地面積1,500.0m²のうち422.0m²であったが、調査区周辺の安全対策上、実際の調査面積は390.0m²であった。調査時の遺構番号は、上述の古代水田を001、自然流路を002とした。以下の報告では、前者を001水田、後者を002流路とする。

2. 遺構と遺物

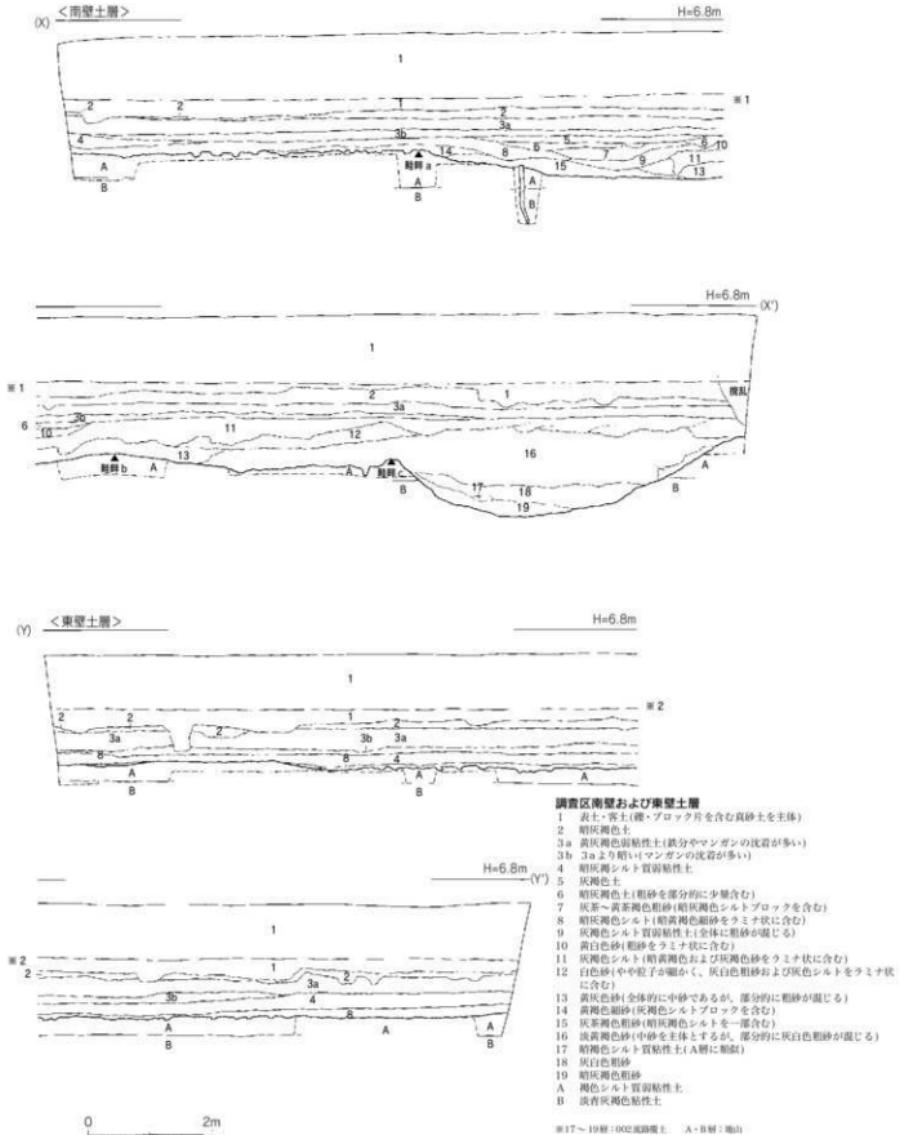
1) 001 水田

上述した様にA層を田面とする水田遺構で、調査区の東側約2/3に拡がる。調査区南壁の土層観察(第6図X-X')では、計3箇所に畦畔と考えられる高まりが認められ、東側から順に畦畔a・b・cとする。また、この畦畔を境界に田面の高低差があり、東側から西側に向かって標高を減じる。東側から順に水田面1・2・3(第5図)とする。

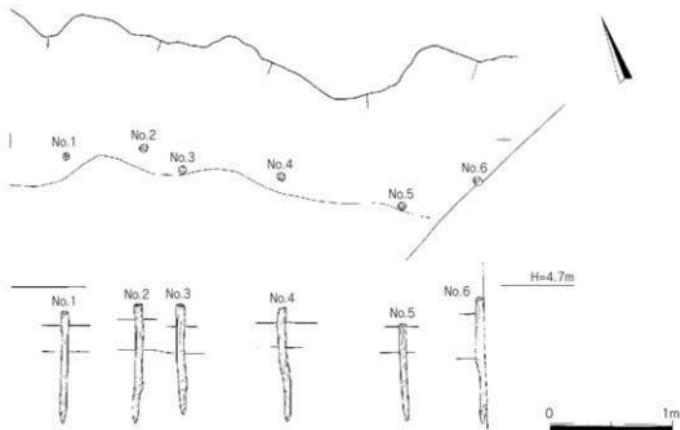
いずれの畦畔も水田面を覆う洪水砂等により削平を受け、地山の基部を僅かに残すのみである。畦畔の盛土は認められず、遺存状況は不良であるものの、基部はほぼ同一方向のGN-67～71°-Wに延びる。また、南東側は調査区外に延長し、北西側は002流路に切られる。なお、調査区内では水



第5図 調査区全体図 (1 / 150)



第6図 調査区南壁および東壁土層実測図 (1/80)

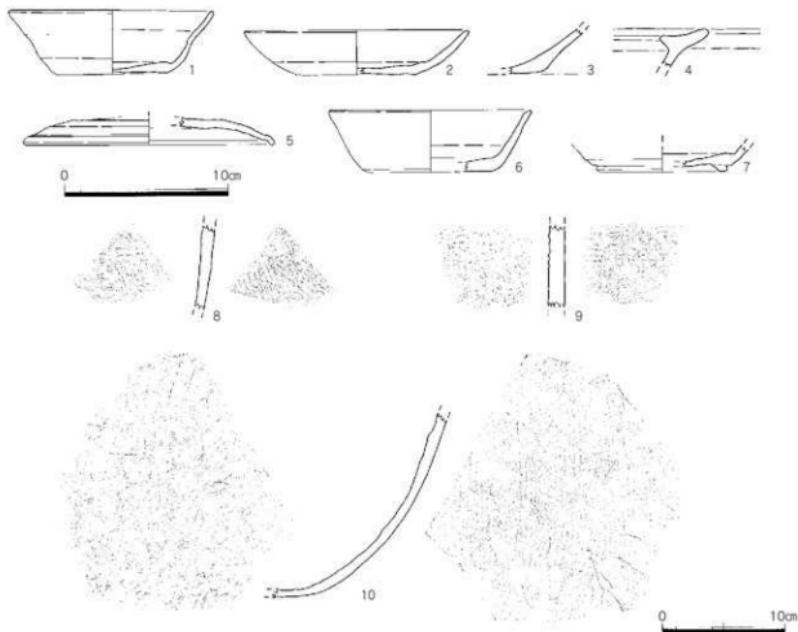


第7図 001 水田杭列実測図 (1/40)

口は認められなかった。まず、畦畔aは、水田面1と2の境界をなすものであるが、比高差0.2~0.3mの段差としてしか認識できなかった。調査区南壁際から同畦畔の下端部に沿うように並ぶ1列の杭列6本(第7図No. 1~6)を確認することができた。検出状況から更に南東側に延長するものと推測される。40~100cm間隔で、径約5cm、長さ約90cm以上の丸太杭が深さ70~90cm以上打ち込まれていた。なお、いずれも頂部を折損する。畦畔の土留めもしくは補強材の一部と考えられるが、詳細な構造は不明である。また、畦畔bは、水田面2と3の境界に位置し、基部幅1.0~1.5m、上端幅0.5~1.0m、高さ0.05~0.1mを測るが、断面は蒲鉾状で上面は明瞭でない。畦畔cは、水田面3の南西側を区画するものであるが、大半を002流路によって失われ、南壁土層で確認したにとどまる。畦畔の東側は002流路の肩に切られるが、現況の断面では基部幅0.3m、上端幅0.2m、高さ0.1mを測る。

以上の3本の畦畔によって区画されたと推定される水田面は、前述のとおり、北東側の水田面1が高く、水田面2、3と順に低くなる。また、各田面は、西側を002流路によって切られる。水田面上では上層堆積物の砂等が詰まつた多数の小穴を確認(図版2-(1))した。径約10cm、深さ5cm前後のものが多く、ヒトや偶蹄類の足跡も少数認められたが、大半は不整な円形状を呈し、稻株痕の可能性がある。流路に近い水田1の西側に顕著であるが、これは「III.-1.概要」で述べたように002流路から氾濫した洪水砂が同流路に近い西側に厚く堆積していたため、検出が容易であったことによる。一方北東側では、田面の上層が薄いシルト層で覆われ、重機での表土剥ぎ取り時にやや掘り下げすぎてしまったために少數の確認にとどまったが、調査区東壁土層(第6図Y-Y')の観察では、A層の上面に一連の小穴と考えられる凹凸が多数認められ、従来は、田面全域にあったものと思われる。

水田面1は、畦畔aの北東側で検出したもので、同畦畔に直交する畦畔によって更に区画されるものと想定されるが、現況で当該畦畔は遺存しておらず、ここでは1枚の水田面としておく。田面の標

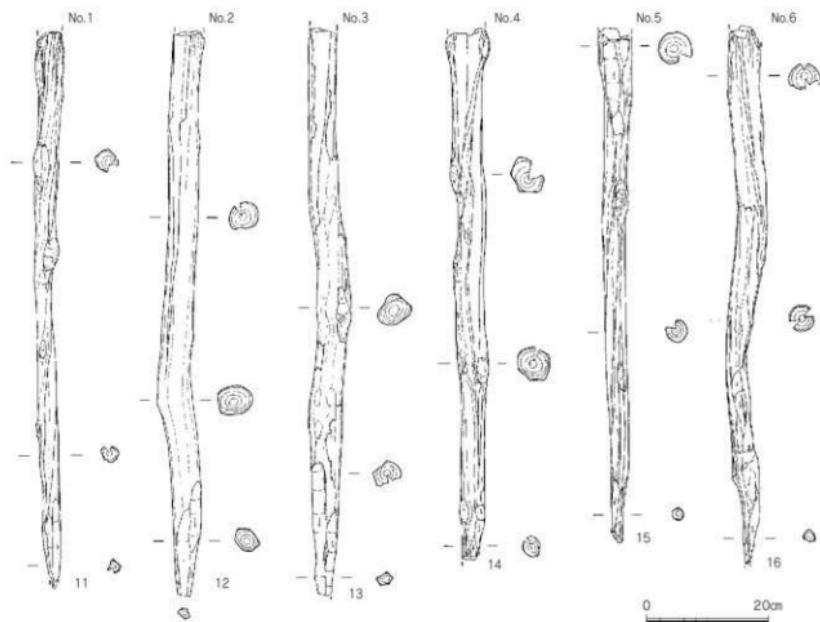


第8図 001 水田出土遺物実測図(1) (10は1/4、他は1/3)

高は4.6m前後で、西側の田面の一部は002流路からの氾濫により抉り取られる。また、水田面2は、畦畔aとbに挟まれた幅2.5m程度の狹長な長方形を呈すると考えられる田面で、標高は4.3m前後を測る。水田面3は、畦畔bとcによって区画されるもので、水田面2に類似した幅2.5m程度の長方形の形状に復元できる。標高は4.2～4.3m前後で、水田面2と比高差はあまりない。

出土遺物(第8・9図) 遺構の性格上、出土遺物は少なく、大半は各水田面を覆う粗砂等の堆積層から出土したものであるが、田面直上に近い遺物(1・10)もある。また、ここでは、先に述べた杭列の木杭(11～16)についてもここで報告する。

1・2は土師器環aである。1は畦畔aとした段落ち部で出土した(第5図中に遺物番号を記載、図版3-(1))。口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完存し、口径12.5cm、器高4.0cmを測る。外底部は回転ヘラ切りで、板状压痕を有する。体部の内外面はヨコナデ、内底部にはナデを加える。淡黄橙色を呈し、良好な焼成である。2は水田面2で出土した小片で、復元口径13.8cm、器高2.7cmを測る。外底部および外面体部下半に回転ヘラ削りを施し、上半はヨコナデである。内面は風化するが、ミガキ調整と思われる平滑な面が残る。3・4は弥生土器の細片である。3は水田面1から出土したレンズ底氣味の底部で、ローリングにより器面が摩滅する。なお、水田面1の出土遺物はこれのみである。4は彎形口縁を呈するもので、高環であろうか。上面が内湾する。水田面2出土である。5～10は須恵器で、いずれも水田面2出土である。5は1/4程度の破片資料から復元した口径15.4cmを測る

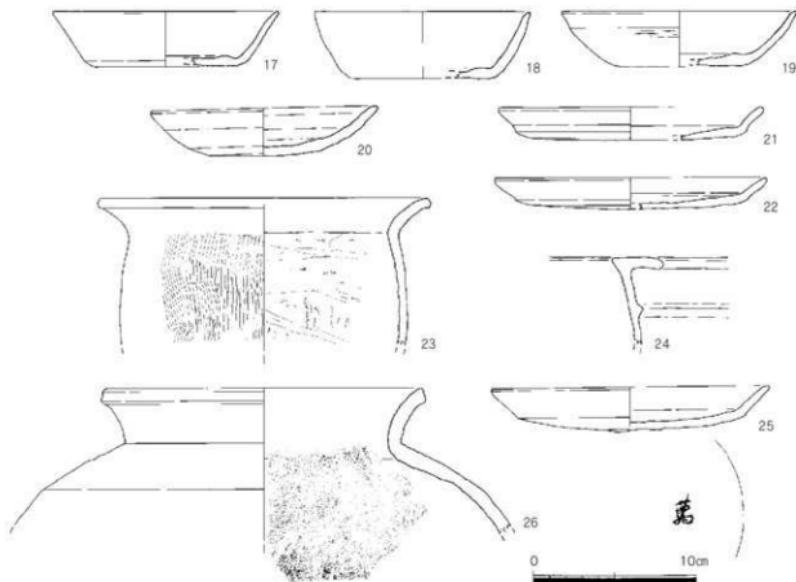


第9図 001水田出土遺物実測図(2) (1/8)

坏蓋cで、つまみを欠損する。断面三角形状で肥厚する口縁部は短く折れ、天井部は回転ヘラ削り、他はヨコナデ調整を行う。やや軟質な焼成である。6は細片からの復元した坏aで、口径12.4cm、器高3.8cmを測る。外底部の遺存箇所が少ないため、不明瞭であるが、回転ヘラ切りと思われる痕跡が残る。7は坏cの底部片で、断面逆台形の低い高台がやや外向きに貼付される。内外面共にヨコナデを施す。8・9は甕の細片で、外面は細かい格子叩き目、内面には同心円當て具痕が認められる。9の外面にはすり消しを加える。10は甕の胴部から底部にかけての破片で、外面は木目直交の擬格子叩き目、内面は不鮮明ながら弧状の當て具痕が見えるが、内外面にすり消しを施す。焼成はやや軟質である。なお、10の約1/2は水田面2の第5図中に遺物番号を記載した位置で出土したものであるが(図版3-(2))、残りは002流路出土遺物と接合した。11～16は先に報告した畦畔aの杭列に使用された丸太杭で、順に図7のNo.1～6に対応する。いずれも頂部を欠損するが、樹皮を残す芯持ち材で、先端部を削って尖らせている。また、16を除いて、枝落としのための削り加工痕が認められる。他に水田面2からモモ種子数点や黒曜石剥片1点等が、また水田面3からは須恵器細片3点が出土している。

2) 002 流路

調査区の西側約1/3を占める幅約5～9mの自然流路で、北側が広い。東岸部分は前述した001水田の西側を切り、西岸は調査区西壁際で大半を確認することができた。なお、その上面も水田の可



第10図 002流路出土遺物実測図 (1 / 3)

能性があるが、検出幅が狭く、足跡等の確認には至っていない。また、東岸の北側では氾濫によって岸の一部が張り出し、灰褐色シルトが混じる黄褐色粗砂の堆積が認められた。流路全体のおおよその方向は、GN-33°-Wで、001水田畦畔の延伸方向とは異なる。調査は全体を0.5m程度人力で掘り下げた上で、南端部分のみをトレンチ掘削し、底面の確認を行った(第6図X-X'17~19層)。なお、底面近くでは湧水がある。全体に粗砂の堆積が著しく、上層の厚い砂層(16層)は、流路をオーバーフローし、001水田の西側を含めて一気に周辺を埋没させた洪沢砂であると考えられる。トレンチ掘削を行った南側では、西岸からの深さ約1.3m、断面は皿形で、壁面の傾斜は緩い。

出土遺物(第10図) 流路の覆土から出土した遺物である。17~23は土師器で、この内17~20は壺aである。17は小片からの復元で、口径13.8cm、器高3.4cmを測る。外底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕を有する。直線的な体部の内外面はヨコナデ、内底部にはナデを加える。器面には鉄分が薄く付着する。18も回転ヘラ切り底で、細かい板状圧痕が認められる。体部は外湾氣味に立ち上がる。復元口径は13.2cm、器高は4.1cmで、器面はヨコナデ調整を施す。19は体部が外湾氣味に大きく開く。外底部の切り離しは風化により不明瞭であるが、弧状の条線が一部に残る。体部内面から口縁部はヨコナデ、体部外面も風化するが、平滑な部分があり、ミガキの可能性がある。内面には鉄分が沈着する。復元14.4cm、器高3.4cmを測る。20はほぼ完存する個体で、口径13.9cm、器高3.0cmを測る。回転ヘラ切り底の外底部は僅かに凸面をなし、ナデを加える。大きく開く体部の外面は口縁部をヨコナデ、体部上半を回転ミガキ、下半を回転ヘラ削り調整する。内面は風化するが、口縁部をヨコナデ、

内底部をナデによって仕上げる。なお、部分的に平滑な面が認められ、ミガキを行っている可能性がある。堅緻な焼成である。21・22は回転ヘラ切り底の皿aで、順に復元口径16.2、16.6cm、器高2.0、1.9cmを測る。器面が摩滅するため、調整が不明瞭であるが、体部外面はヨコナデ、内底部はナデ調整と思われる。体部外面は強いヨコナデにより凹面をなし、下端に稜が認められる。23は復元口径20.4cmを測る甌で、外反する口縁部にあまり張りのない胴部を有する。口縁部外面はヨコナデ、胴部外面は縦方向の刷毛目を施す。胴部内面にはヘラ削りが行われ、頸部との境界に稜線が認められる。24は弥生土器中期の甌の細片で、器面の風化が著しい。水平な鋸形の薄い口縁部を呈し、やや張りのある胴部に続く。口縁下に断面三角形の突帯1条が巡る。25・26は須恵器である。25は上層で出土した皿aの完形品で、口径17.0cm、器高2.9cmを測る。外底部は回転ヘラ切りで、周縁のみにナデを加える。また、「萬」の墨書きが行書体で記される。外面はヨコナデ調整を行い、内底部にはナデを施す。良好な焼成である。26は甌で、外反する口縁部は肥厚し、口唇部に面をなす。頸部の稜は、外面は強く、内面は緩い。全体にヨコナデを施すが、体部内面には当て具痕が認められる。色調は暗赤灰色を呈する。

3. 結語

今回の調査で検出した水田1面は、自然流路の氾濫によって畦畔の大半が失われ、水田構造や水利施設等に不明な点が多いが、水田および流路出土の土器や水田区画方位等の数少ない材料から得られた所見をまとめておきたい。

まず、001水田の時期であるが、出土遺物には弥生土器(3・4)や8世紀以降の土師器(1・2)、須恵器(5~7)等があり、大半は水田面を覆う洪砂等から出土したが、1の土師器壺aと10の須恵器甌は、その下位に僅かに砂層を挟むものの、水田面近くで出土した資料である。しかし、10は本文中でも記したように002流路の堆積層出土遺物と接合した資料であり、同時期の洪水による埋没を示す土器となるもの、水田時期を示す材料としては不適当で、時期も不詳である。ここでは、遺存状況の良好な1の土師器が示す8世紀後半頃の年代を水田経営に時期に近い年代として考えておきたい。

また、002流路の出土遺物も24の弥生土器や外底部の調整不明な19の土師器を除くとおおよそ8世紀代に取まる。遺構の性格上、小片が多い中、20・25はほぼ完存する資料で、共に外底部は回転ヘラ切りが施される。前者は外面の回転ミガキの範囲が狭く、後者は外底部の大半が未処理である等、新しい要素が認められ、同様に8世紀後半の年代が推定できる。なお、吉祥句である「萬」を墨書きする25は祭的な印象を有するが、上層の砂層出土である。以上から流路の埋没時期を8世紀後半以降として考えておきたい。これらから、001水田の経営時期と002流路の氾濫に伴う水田の埋没はあまり大差がないことが予測される。

また、僅かに残る畦畔の基部から推定した水田区画の方位はGN-67~71°-Wで、37°西偏する周辺条里地割の方位とは異なっている。「II. -1. 席田青木と周辺の遺跡」でも簡単に触れた下月限C遺跡では、重層的な水田面の検出によって8世紀後半から9世紀前半の間に条里地割が施行されたことが指摘されている。よって、今回検出した水田面は施行以前の所産である可能性が高いが、時期を比定した材料や根拠に乏しく、周辺の調査成果を待って再考していきたい。

参考文献

山本信夫「統計上の土器・歴史時代土師器の編年研究によせて」『乙益重隆先生古稀記念 九州上代文化論集』1990年
中島恒次郎「聖武朝の土器—九州(大宰府と周辺)ー」『古代の土器研究 聖武朝の土器様式』2005年

図 版



作業風景

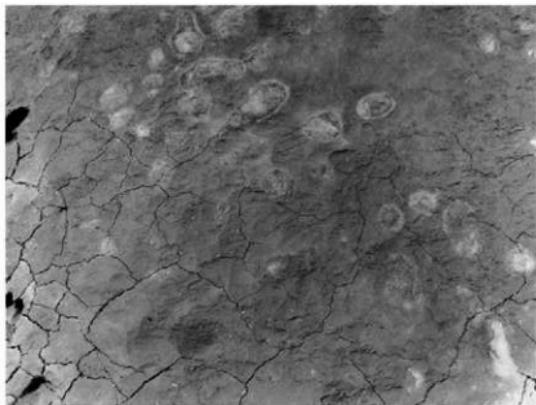


(1) 調査区全景(西から)



(2) 調査区南壁土層(北西から)

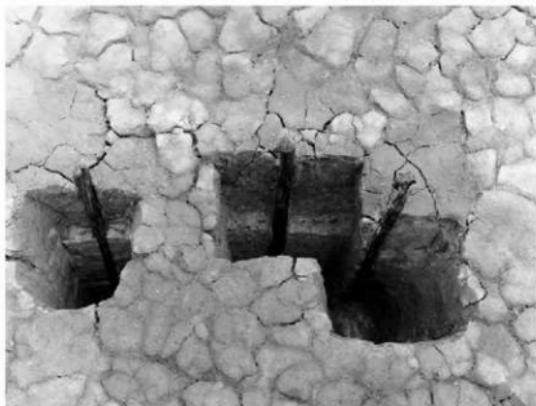
図版2



(1) 001 水田中央部足跡検出状況
(南から)



(2) 001 水田杭列検出状況
(北西から)



(3) 001 水田杭列断ち割り状況
(南から)



(1) 001 水田土器出土状況
(北から)

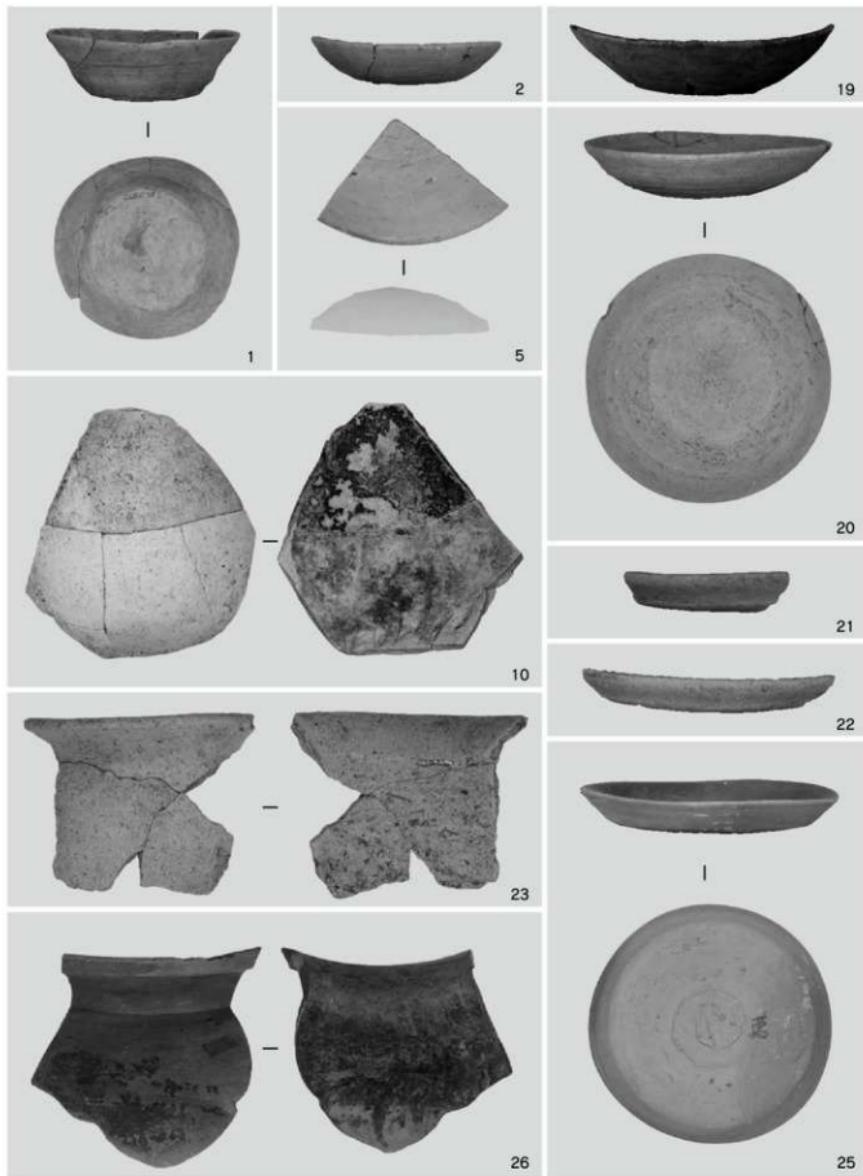


(2) 001 水路須恵器出土状況
(北から)



(3) 002 流路南壁土層
(北から)

図版4



出土遺跡

報告書抄録

ふりがな	むしろだあおきいせき7 一だい7じちょうきほうこくー						
書名	席田青木遺跡7						
副書名	—第7次調査報告—						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1120集						
編著者名	榎本義嗣						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号						
発行年月日	2011年3月18日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
むしろだあおきいせき 席田青木遺跡	ふくおかせんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくおおあざひらお 博多区大字平尾	40132	020080	33° 35' 20"	130° 27' 11" ~ 20090527	390.0	記録保存 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
席田青木遺跡	水田	奈良時代	水田・自然流路	土師器・須恵器・木製品	奈良時代の水田1面 を確認		
要約	福岡平野東端部の沖積地で行った調査で、8世紀後半頃と推定される水田面1面を確認した。ほぼ同時期に氾濫した自然流路の洪水砂によって、水田が埋没するものの、畦畔の大半が流出し、遺構の遺存状況は不良であった。このことから、水田の構造や水利等に不明な点が多いが、水田区画のおおよその方位は周辺に残る条里地割とは異なっており、地潮施行前の水田であると考えられる。						

むしろだあおき 席田青木遺跡 7

—第7次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1120集

2011(平成23)年3月18日 発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092) 711-4667

印 刷 株式会社 エージェント
福岡市中央区高砂1丁目20番2号
(092) 533-6006